新見公立短期大学紀要　第23巻
pp. 35－44, 2002

論　稿

子どもの心の育ちと保育者のかかわり(2)
－1歳児の自然とのかかわりを中心に－

高月　教恵　　佐藤　照美*　　三宅るり子**

保育方法学

Children's Emotional Development and Childcare Givers' Interactions (1)
－Focusing on Relations of Children in One-year-old Class with Nature－

Norie TAKATSUKI　　Terumi SATO　　Ruriko MIYAKE

(2002年11月1日受理)

自然とかかわっている場面での1歳児Y男とN子の一年間の行動観察記録を中心に考察した結果、1歳児Y男とN子の心の育ちは、興味関心はあるが触ることができなかった小動物を持ったり追いかけて捕ろうとしたり、小動物や飼育動物に自分から餌やりをしたり、独占欲がまだ強いものの保育者に注意されると友達と共有しようとし、友達を誘ったり誘われたりしていっしょに野菜や飼育動物にかかわったり、名称を正確に発音することができるようになり、自然に対する自分の感動や思いを自己中心的な表現ではあるが言葉で表現できるようになったことと考えられる。子どもの心の育ちへの保育者のかかわりとしては、先の研究[1]と同様に、“環境構成”と“いっしょに自然とかかわる”という保育者自身が子どもの生活を誘導することが重要なポイントになることが指摘できるのではないかと考えられる。また、“環境構成”についても“いっしょに自然とかかわる”ことについても年齢差（0歳児と1歳児）によって違いが窺える。

はじめに

筆者は先の研究[2]で、子どもの「心」を「思考・感情・感覚・直感をもっているものであり、その働きに基づいて、自分を律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性のもとになっていると考えられるもの」と、とりあえず定義した。そして自然とかかわっている場面での、0歳児A男（11ヶ月）とH子（11ヶ月）の一年間の行動観察記録を中心に、子どもの心の育ちと保育者のかかわりについて考察した。その結果[3]、0歳児A男とH子の心の育ちは、小動物を怖がり興味のなかった自然に興味関心をもち始めたり、言葉で名称を表現できるようになり、その上名称を言いながら感動や喜びを表現できるようになったことと考えられる。そしてその心の育ちは“保育者に誘われて自然にかかわること”が大きなきっかけになっていると考えられる。さらに子どもの心の育ちへの保育者のかかわりとしては、“環境構成”と“いっしょに自然にかかわる”という保育者自身が子どもの生活を誘導することが重要なポイントになること

*里見保育園　　**寄島西保育所

が指摘できるのではないかと考えられる。

本稿では、“自然とかかわっている”一歳児Y男・N子の行動観察記録を中心に、子どもの心の育ちと保育者のかかわりについて考察する。

1．研究の目的と方法

(1) 研究の目的

日々の保育のなかで自然とかかわっている子どもの様子を、保育者が実践指導する中で観察した記録に基づいて、自然とかかわることによって子どもの心の何が育ち、その育ちに保育者はどのようにかかわればよいかについて考察する。

(2) 研究の方法

保育者（担任）が子どもと共に生活する中で観察する自然観察法である。

①場所　浅口郡Y保育所（0・1歳児混合クラス8名、2・3歳児混合クラス7名、3・4・5歳児混合クラス20名、職員数20名）
浅口郡S保育園（0・1歳児混合クラス24名、2歳児1クラス20名、3歳児2クラス32名、4歳児2クラス28名、職員数19名）

②対象　Y保育所1歳児クラスY男（平成10年4月30日生）
S保育園1歳児クラスN子（平成10年8月12日生）

③観察者　担任保育士

④観察期間　平成12年4月～平成13年3月

⑤観察場面　自然とかかわっている場面での子どもの様子

⑥記録整理の方法　毎月一回、筆者を含む岡山県井笠三郡13保育園の代表保育士（観察者）で研究会をもち、13園から出された観察記録について話し合いをし、子どもの姿と保育者のかかわりについて整理する。

2．研究の結果と考察

(1) Y男の場合

① 4月当初のY男

Y男（1歳11ヶ月）は、祖母・父・母・姉（高1）・兄（小6・小1・4歳）3人・本人の8人家族である。生後11ヶ月より入園し、Y保育所0・1混合クラスに在園している。年長混合クラスの兄といっしょに通園している。家の近くに遊び場があり、近所に友達もいる。

4月当初のY男は、言葉は大体はっきりと発音することができ、二語文も少しずつ出てきているが、時々赤ちゃん言葉になる時もある。保育者の言うことはよく理解でき、外に行く時は帽子をかぶって靴をはきかえようとするなど基本的生活習慣も身についてきている。しかし、短気で気に入らないとすねて、転んで、手足をバタつかせて大泣きをし、他のことは目に入らない面がある。人の物を自分の物と思い「Yちゃんの」と主張する姿がよく見られる。兄と一緒に遊ぶことが多いため、小動物や虫に触ることはできないが好きである様子が窺える。

② Y男の一年間の育ちと保育者のかかわり

Y男の一年間の育ちをみると（記録1参照）、4月ではアリを「モーモー」と言い、スズメを「チュンチュン」と言っていることから、言葉で名称を表現しようとする様子が窺えるが、アリやスズメを触ろうとはしない。そしてアリが歩く様子を見て「おうちへかえった、おかあたんいった」と言っている。また砂場で遊んでいる時「いっしょにしよう」と4歳児E子に誘われただけで、自分のスコップを取られると思い、E子をたたく姿が見られる。5月では年長児に誘われてイチゴ畑に行き、保育者に採り方を教えてもらって採り、自分で洗って勝手に食べる。落ちたイチゴを食べようとして注意されると泣く。おやつの時、保育者にイチゴがジャムに変身したことを教えてもらっても「イチゴねぇ、どこにあるん？」と聞きながら食べていることから、イチゴ畑のイチゴを食べることにはとても興味関心がある様子が窺えるが、ジャムのように形が変わるとイチゴの味わいは薄くなることが窺える。6月ではジャ

記録１　Ｙ男の一年間の育ちと保育者のかかわり

	Ｙ男の姿	保育者のかかわり
４月	テラスへ出る。アリを見て、「モーモー」と言う。 アリが歩くのを見て「おうちへかえった、おかあたんいった」と言い、ブロックで遊び始める。	テラスで遊べるよう、プラスチック製のブロックを出して置く。 「これはもーもーじゃないよ」「ありって言うんよ」と教える。
	外遊びの時、スズメを見つけて「チュンチュン」と言う。 「すき」と答えて、しばらく見ている。	「チュンチュン好き？」と聞く。 砂場で遊んでいた年長組に、小さい組の子ども達が遊びに来たら仲間に入れてやってほしいと伝えておく。
	おやつの後、年長組が遊んでいる砂場に加わって遊ぶ。 Ｅ子(4歳児)に「いっしょにしよう」と誘われると、自分のスコップを取られると思い「Ｙちゃんの」と言ってＥ子をたたく。 カップに草を入れて来て、Ｅ子・Ｍ子(4歳児)と遊ぶ。	「べっちんしたらダメ、一緒にしよう」と注意する。 見守る。
５月	年長児に誘われ、イチゴ畑に行く。 両手に持って自分で洗い勝手に食べる。 ブランコで遊んでいても年長児に誘われるとイチゴ畑に行く。落ちたイチゴを拾って食べようとする。 注意されても食べようとする。 泣く。 ジャムを見ながら「イチゴねえ、どこにあるん？」と聞く。	イチゴの採り方を教える。 年長児とイチゴを採ったり、洗って食べたりしている様子を見守る。 「Ｙくん、それ落ちていたからだめよ。もう一回採っておいで」と言う。 Ｙ男の手からイチゴを取る。 手を引いて、イチゴを採りに行く 朝採ったイチゴをジャムにして３時のおやつの時見せる。「朝のイチゴがイチゴジャムに変身したんよ」と言う。
６月	ジャガイモ畑に集まり待っているが待ちきれず、シーソーで遊ぶ。 保育者がジャガイモを抜いているのを見て、シーソーで遊ぶのをやめて畑に来る。 「すごいなあ」「よいしょ、よいしょ」と言いながら、抜く。「とれた！」「とれたでぇ」とうれしそうに保育者に見せる。 友達がイモを掘り出すと、感動する。 イモを箱に入れ、入っているイモを２・３分じっと見て、船の遊具の方へ行く。	イモ畑にイモを入れる箱を用意する。 集まった子ども達にジャガイモ堀の話をし、畑から一本抜いて見せる。 「すごーい、たくさんついているね」と一緒に喜ぶ。 共感する。
７月	イスの上に正座して、ニコニコして待つ。 「いただきます」の挨拶をして、蒸かしたジャガイモの皮を自分できれいにむいて食べ始める。 「マヨネーズ」と答える。 「うん」と言い、マヨネーズをつけて食べる。 「ください」と言う。 「アート」と言い、皮をむいて食べる。	ホールに机・イスを用意し、年長組と交流がもてるようにしておく。 蒸かしたジャガイモを配る。 「Ｙくん、マヨネーズかバターつけて食べる？」と尋ねる。 「はい、マヨネーズつけて食べてね」とアルミホイルのはしにマヨネーズを出す。 「おかわりいる人あるよ」と言う。 「はい、Ｙくんもどうぞ」と言って渡す。
	「できたん？」と言う。 友達と一緒に「いただきます」をして、食べはじめる。 「おいちい、ほれ」と言って、夢中で全部食べる。	５歳児が収穫したトウモロコシを給食室で茹でてもらう。１０時頃、年長組の部屋で食べることにし、１歳児も座れるよう、イスや皿を用意する。 トウモロコシを一人一人の皿に配る。 「トウモロコシ、食べようね。これ、保育園でできたんよ」と言う。 「いただきます」の挨拶をする。 「おいしい？」と聞く。
８月	兄がしている色水遊びを見て「Ｙ ちゃんもする」と言う。「Ｙ ちゃんもペットボトルがいる」と言って、保育者の所に来る。 ペットボトルを持って兄の所に行き、色水遊びを始める。「おにいたん、ちょうだい」と言い、色水を少し入れてもらう。 赤紫の色水が出来ると「せんせい、みて」と見せにくる。 「だめ、Ｙちゃんの」と言って、兄の所に行く。 次々登園して来る友達に色水を見せる。	登園後すぐ、Ｙ男の兄（４歳児）が、ペットボトルがいるとやって来たので渡す。 ペットボトルを渡す。 見守る。 「きれいじゃな、ジュースみたい。のんでいい？」と聞く。
９月	道中、兄の通う小学校を見て「おにいたーん」と叫ぶ。 広場に着き、走り回る。バッタを見つけ「おったでぇ、バッタ、Ｙちゃんのでぇ」と言いながら追いかけるが、捕れない。 「とれんなぁ、あっちいったんで」と言いながら、トンボを目で追う。 「あっ、トンボおったんでぇ」と追いかける。 「Ｈくん、トンボおったでぇ」「いっぱいおったなぁ」「Ｙちゃんとれんよ」と同じクラスのＨ男に話しかける。	近く(園から200m離れた)広場に散歩に行く。 広場の横は道路なので、安全に気をつけるよう注意する。 「Ｙちゃん、トンボが来たよ」と声をかける。 見守る。
	登園後、トンボを見て「いっぱいおるなぁ、Ｙちゃん、とったげる」と言って、園庭のトラックを走る。トンボが捕れないので、ブランコへ行く。しばらくして、Ｈ男が登園してきたのを見つけ、「Ｈくん、トンボおるで」「おいでおいで」と誘う。Ｈ男がトンボを指差すと、「トンボおるじゃろう、トンボ」と言ってしばらく見て、砂場に行く。 「せんせい、トンボおらんかったなぁ」「おかあたんいったでぇ、もうおうちかえったんじゃあ」と保育者に話しかけながら、部屋に入る。	朝のおやつの時間になったので、保育室に入るように誘う。
１０月	「せんせい、おいもがのぞきょうる。あった」 「でた、ほれ、おいも」と頭より高く両手に持ち上げて見せる。 飛行機が飛んでいるのを見つけると、「ひこうきオーイ、オーイ」「バイバーィ」と叫ぶ。 またイモを掘る。Ｒ子(３歳児)の肩に土がかかる。 Ｒ子の肩の土をはらってあげ、またイモを掘る。 ５cm 位のイモが出てくると、その場に捨てる。 かごに入れた後、またイモを掘り５cm 位の小さいのを見つける。「これかわいい」と言ってかごに入れる。	イモを掘りやすいように、イモヅルをカマで切り、掘る所の土を柔らかくしておく。１歳児ｸﾗｽの子ども達は１個のイモを３人で掘るようにする。 「Ｙちゃん、Ｒ子ちゃんの肩、ポンポンしたげて」と言う。 「Ｙちゃん、よいしょ」「ここひっぱってみい」と言いながら、見守る。 「Ｙちゃん、小さいのはいらんのんなぁ、大きいのをかごに入れておいで」と言う。
	「せんせい、まだ」「Ｙちゃんのある？」「Ｙちゃんのとったイモたべるん？」と聞く。 にこにこして待つ。 焼き芋を手に持って一口食べ「おいしいな、まだある」「これ、Ｙちゃんがとったイモでぇ」と友達に見せる。	イモ畑の前で、誕生日会をかねて焼き芋パーティをする。 「うん、あそこでＴ先生が焼いてくれてるんよ」と言う。 「Ｙくん、おいもが落ちたらいけんから食べようね」と言う。

11月	リュックを背負って園庭に出て待っている。 うれしそうに歩く。　　神社に到着する。 切り株を見つけて上がったり降りたりする。 「わぁおっきい」と言って、葉っぱをゴミ箱に捨てる。 友達がドングリを拾っているのを見て一緒に拾う。0歳児のK男にドングリの皮をむいてやる。兄のH男(4歳児)がドングリのたくさん入ったナイロン袋を渡してくれるが受け取らない。	10時に全園児で近くの神社に出発する。 リュックを置いて、落ち葉拾いに誘う。 「Yくん、これ大きい葉っぱよ、どうぞ」と言って葉っぱを渡す。 見守る。
12月	年長組と2歳児組が二十日大根を抜いているのを見て、「みんな、なにしょん？」と聞く。 「Yちゃんもぬく」と言う。 二十日大根を抜いて、「Yちゃんので、Yちゃんがぬいたんで」と言う。 H男とK男がY男の二十日大根をのぞきこんで見ようとするが、見せないように後向きになり、隠そうとする。 「みるだけで」と言って、見せる。 「いっしょじゃな、もってかえろうな」と言う。	「ん？二十日大根抜いとんよ」と応える。 年長組のを抜かせてもらうことにする。 「Yくん、みんなも見せてあげて」と言う。 「みんなのもあるよ。持って帰ってね」と言う。
1月	「せんせい、これなに？」と聞く。 薪を見つけて「これなに？」と聞く。 薪の側でとんど焼きを少し見ているが，薪を持ってブランコの方へ行こうとする。 「いるんじゃ、Yちゃんの」と言って泣く。 「わかった、もうせん」と応える。 「うん」と言う。 みんなと一緒にきなこもちを食べる。	園庭の砂場の前にとんどの用意をする。 「とんどの用意よ」「みんなでおもち焼いて食べような」と応えて、焼く用意をする。 「たきぎって言うんよ。これに火をつけて、おもち焼くんよ」と応える。 「Yくんそれ持って行ったら危ないよ」と注意する 「あの木を持って行ったらおもちが焼けないんよ。それにな、木を持って転んだり、友達たたいたらけがするんよ。わかった？」と注意する。 「Yくんもうちょっとでおもち焼けるよ」と言葉をかける。 みんなに、きなこもちを配る。
2月	畑の前に転んだボールを追いかけて行き、しばらく畑を眺める。 4歳児のH男とE子の後について走って来る。 保育者と一緒にブロッコリーをはさみで切る。	Y男の所に行く。 「すごーい、ブロッコリーがたくさんできとるよ」と、園庭で遊んでいる子ども達に声をかける。 H男とE子に給食室に持っていってもらうよう頼む。
	何も言わない。 食べる。 返事はないが、全部食べる。	数日後、ブロッコリーがシチューの具として、給食に出る。「Yくん、これこの間採ったブロッコリーで、おいしそうじゃなぁ」と言う。 「さあ、たべてみよう」と誘う。 「どう？おいしい？」と尋ねる。
3月	年長児に手をつないでもらって行く。 土手に座って年長児がツクシを探っているのを、友達と一緒に見る。 「わーいわーい、いこいこ、ツクシとりにいこう」「いっぱいあるなー」と喜ぶ。 「ツクシどこへ入れるん？」と尋ねる。 兄のH男の袋にツクシを入れる。 1歳児のH男に「ツクシいっぱいあるなー」と言い、一緒にツクシを採る。	園外保育で全園児でツクシ採りに行く。小さい組は年長児に手をつないでもらって2人組で行く。 「着いたよ。見てごらん。すごーいたくさんツクシがあるよ」と言う。ツクシを踏んではいけないので年長組から順番に採ることにする。 「そろそろ小さい組さんもツクシ採りに行くかな」と誘う。 「お兄ちゃんの袋に入れさせてもらったら」と応える。 見守る。

ガイモを「よいしょ、よいしょ！」「とれた！」「とれたでぇ」と言って掘り、友達がイモを掘り出すと本人も感動する様子から、Y男のジャガイモ掘りの喜びが強く伝わってくる。7月では収穫したジャガイモを蒸かしてもらい、自分で丁寧に蒸かしたジャガイモの皮をきれいにむいて食べていることから、収穫したジャガイモへのY男の特別な思いが感じられる。9月では園外保育でトンボを見つけて追いかけ、「Hくんトンボおったんでぇ」「いっぱいおったんなぁ」「Yちゃんとれんよ」とH男に話しかけている。また登園後園庭でトンボを見つけて「Hくんトンボおるで」「おいで、おいで」と誘っていることから、トンボを通して同じクラスのH男とかかわる様子が窺える。そしてトンボがいなくなると「おかあたんいったんで、もうおうちかえったんじゃ」と言っている。4月のアリに対しても同様なことを言っていることから、アリやトンボが自分から離れたことに対しては母親の所に帰ったのだと思う傾向がある様子が窺える。10月ではサツマイモ掘りをして「せんせい、おいもがのぞきょうる。あった」「でた、ほれ、おいも」とイモを頭より高く両手に持ち上げて見せていることから、Y男の収穫する喜びが伝わってくる。そして掘っていた砂がR子にかかり、保育者に「ポンポンしたげて」と言われると、R子の肩の土をはらってあげていることから、友達を思いやることができるようになった心の育ちが窺える。焼き芋を「おいしいな、まだある」「これ、Yちゃんがとったイモで」と友達に見せて食べていることから、友達と収穫する喜びを共有し、友達に認めてもらいたいというY男の思いが感じられる。11月では園外保育で落ち葉を拾いゴミ箱に捨て、ドングリ拾いにもあまり興味を示さないことから、落ちている物を拾うことに抵抗があるY男の様子が窺える。12月では二十日大根を抜いて「Yちゃんので」と言ってH男

やK男がのぞきこむと見せないようにし、保育者に「見せてあげて」と言われると、「みるだけで」と言って見せている。保育者が「みんなもあるよ。持って帰ろうね」と言うと、「いっしょじゃな、もってかえろうな」と言っている。このことから、友達と思いを共有することはできるが、自分のものをあげるほどの友達への思いやりは育っていない様子が窺える。2月では畑のブロッコリーを採り、数日後シチューの具として給食で食べるが、保育者の話しかけにも反応せず黙って食べていることから、収穫したものを数日経って食べることには感動が薄いと考えられる。3月では園外保育でツクシを採りに行き、年長組が採っているのを見て「わーいわーい、いこいこ」と喜び、「いっぱいあるなー」と言ってH男と一緒にツクシを採っていることから、ツクシ採りを楽しむ様子が窺える。

以上のことから、イチゴ・ジャガイモ・サツマイモ・二十日大根を採ることを通して収穫することへの興味がでてきたと考えられる。6月に収穫したジャガイモを蒸かしてもらい、皮を丁寧にむいて食べたり、収穫したサツマイモの焼き芋を「おいしいな、まだある」「これYちゃんがとったイモで」と友達に見せながら食べている様子から、Y男の感動が伝わってくるが、イチゴジャムのように形が変ったり、ブロッコリーのように収穫して数日後に調理された物には感動が薄い様子が窺える。また小動物には興味を示すが触ることができない。しかしトンボを見つけて追いかけている様子から、小動物への親しみは育ってきている様子が窺える。そして小動物や植物への自分の思いを「おうちかえった、おかあたんいった」「おいちい、ほれ」「いっぱいおったなぁ」「おいもがのぞっきょうる」「いっぱいあるなー」と表現できるようになってきている様子が窺える。保育者に注意されると友達と共有することができるが、まだまだ独占欲は強い。しかし友達がジャガイモを掘り出すと感動したり、トンボ採りにH男を誘ったり、H男と一緒にツクシ採りをして友達とかかわろうとする心の育ちも窺える。

Y男の一年間の育ちに保育者がどのようにかかわったかをみると（記録1参照)、保育者はイチゴ・ジャガイモ・トウモロコシ・サツマイモ・二十日大根・大根・ブロッコリー等を子どもの目につきやすい園内の畑で育て、子どもといっしょに収穫し、一緒に食べる機会をもっている様子が窺える。「収穫する時には、一人に一つは採らせるよう心がけた」[4]と報告されていることから、保育者は一人一人の子どもが収穫の体験をするように援助している様子が窺える。さらに園外保育に連れて行って、バッタ・トンボ捕りやドングリ・落ち葉拾いやツクシ採りの体験を子ども達ができるように積極的に誘導している様子が窺える。

(2) N子の場合

①4月当初のN子

N子（1歳7ヶ月）は、父・母・兄（6歳）・本人の4人家族である。生後7ヶ月より入園し、保育園0・1混合クラスに在園している。団地に住み、周りに同年齢の友達がいて、団地内には公園もある。

4月当初のN子は、登園時に泣くことはなく、好きなおもちゃを見つけては一人で楽しんで遊ぶ。ツクシを見て「ツツツツ」と言い、カタツムリを見ながら保育者といっしょにカタツムリの手遊びをし、「中にかくれているよ」と保育者に教えてもらうと“おいでおいで”と手を振る。このことから小動物に触ることはできないが、小動物や植物に興味のある様子が窺える。

②N子の一年間の育ちと保育者のかかわり

一年間のN子の育ちをみると（記録2参照)、4月では登園するとカタツムリを見て「ねんね、ねんね」と殻をたたき、カタツムリが入ったプリンカップを持ち歩き、友達が触ると嫌がっている。カタツムリを落としても気付かず、保育者に「痛い痛い言っているよ」と言われるとよしよしと撫でていることから、カタツムリを身近に感じ、カタツムリを思いやる様子も窺える。昼食後、頭を出したカタツムリに気づき目をとがらせて「あっ」と声をあげて指さしをしている様子から、N子の驚きが伝わってくる。5月でははじめて見るザリガニは怖くてケースから離れて様子を見ているが、保育者がいっしょにかかわり「ザリガニ、ザリガニ」と名前を知らせると、ケースに

記録２　Ｎ子の一年間の育ちと保育者のかかわり

	N子の姿	保育者のかかわり
4月	「ウワァー」と足をバタバタさせながら指差す。「ツツツツ」と言いながら、ツクシを友達に渡したり取ったりして遊ぶので、ツクシはバラバラになる。 歌は歌わないが、手遊びはいっしょにする。 頭を出さないカタツムリに「おいでおいで」と手を振る。	園舎が工事中のため戸外に出られないので、３匹のカタツムリを小さいケースに入れ、家から持って来たツクシをカップにさし、目のつきやすい所に置く。 カタツムリの歌を歌いながら手遊びをする。 頭を出さないカタツムリを見ながら、「中にかくれているよ」と知らせる。
	登園するとカタツムリが気になりカタツムリの入ったカップを見ている。頭を出していないカタツムリを見て「ねんね、ねんね」と殻を手でたたく。頭を出さないのですぐ飽きてしまい、ナズナを触ったり見たりする。 ベランダにくっついているカタツムリを見つけて「アーアー」と言いながら、顔を近づけじっと見る。 「ワァーワァー」と言ってじっと見る。 カタツムリが入ったプリンカップを持ち歩き、友達が触ると嫌がる。 カタツムリを落として、気付かずにいる。 カップに入れて、よしよしと撫でる。 昼食後、頭を出したカタツムリに気付き、目を大きく開き、口をとがらせて「アッ」と声をあげ指差す。 絵本を見ている時を気になり、ちらちらと見る。	子どもが家から持ってきたナズナをカップにさし、目のつきやすい所に置く。 「ここにカタツムリのうんちがあるよ」と気付かせる。 カタツムリをプリンカップに入れる。 「友達にも見せてあげて」と言う。 カタツムリが「痛い痛い言ってるよ」と落ちたことを知らる。 やさしい気持を認める。 共感する。 見守る。
5月	ケースに近づこうとせず、ケースから逃げる。 友達の後からケースを見る。 ケースから離れたり近づいたりしながら、だんだん嬉しそうな顔になり、ケースを顔に近づける。 「ガニガニ」と笑顔で言う。 他の保育者一人ひとりを指差しながら、「ガニガニ」を繰り返す。 指を入れようとするが、怖くてすぐやめる。 M子とＩ男がケースを揺らし始めると「だめ」と言って、ケースを取りこむ。 ケースを差し出し、M子やＩ男といっしょに見る。 「チョキチョキ」と言いながら手を動かす。	登園時、子ども達が園内のザリガニを眺めているので、年長組からザリガニのケース(8×15×12)を借りてきて、部屋に置く。 ザリガニが入っていることを知らせる。 いっしょに見る。 「ザリガニ」「ザリガニ」と繰り返して名前を言う。 「触ってみる」と尋ねる。 「M子ちゃんやＩ男くんにも見せてあげて」と言う。見守る。 ザリガニの鋏を真似てやってみる。
6月	ケースを指さし、目を大きく開き口をとがらせて見る。オタマジャクシ」が動くたびに、口をもごもごさせ動きを指で追う。 M子が隣で「オタマジャクシ？」と言っても気にしないで、ケースを指差しじっと見ている。 「‥シ‥シ」と言う。 「カエルになるまでみようね」と真似て言う。 M子といっしょに「うん」と言う。	プールの中にいたオタマジャクシをケース(13×20×15)に入れて保育室に持って帰る。 「オタマジャクシよ」と紹介する。 オタマジャクシに手や足が出て、カエルになることを知らせる。「カエルになるまで見ようね」と言う。
7月	靴を入れようとしてトンボを見つけ、驚いた表情でケースを見つめる。 ケースを指さしてトンボがいることを知らせる。 「モウ?モウ？」と言って尋ねる。 「ボ・・」と言う。 靴を片付けながら、ちらちらとトンボを見る。 「トンボ、トンボ」と繰り返し言い、笑顔で体を動かし、部屋へ行く。	朝飛んでいたトンボをつかまえて、ケース(15×30×20)に入れ、下駄箱の上に置く。 「どうしたん？」と尋ねる。 「なんじゃろう？」と問いかける。 「トンボ」と教える。
8月	ケースを見に行き、カブトムシを見つけ立ち止まる。 「モウモウ」と言い、目を大きく開き口をとがらせる。 「カブトシシ」と言う。 カブトムシがけんかをしているのを見て「あーあー」と言って指差す。 隣にいたＳ子が「だめよ」とカブトムシに言うと、机をたたいてけんかをしてはいけないことをカブトムシに伝えようとする。 「マンマ？」と尋ねる。 保育者と一緒に部屋に帰るが、「カブとシシ」と言い、廊下の方を指さし見つめる。	廊下のケース(20×40×20)の中に、カブトムシがいることを知らせる。 「なにか動いとるなぁ」と言う。 「これはカブトムシって言うんよ」と教える。 ゼリーを食べているカブトムシを見つけ、知らせる。
9月	なかなか近寄ろうとしない。 友達は「こんにちは」とおじぎをするが、少し離れて見ている。	戸外遊びの時、ウサギとチャボの小屋に誘う。「ウサギさんこんにちは」と話しかける。 恐くないことを知らせ、手をひいて側に連れて行く。
	友達とウサギに向かって「こんにちは」と言う。 「ウサギさんこわいね」と言う。友達に「こわくないよ」と言われ、ニコニコして「ウサギさーん」と大声で叫ぶ。 M子にも「こわくねーが」と言われると、ニコニコして「ウサギさーん」と叫ぶ。	子ども達に誘われてウサギ小屋に行く。
10月	部屋に迷い込んで来たトンボを見つけて「ワァートンモ、トンモ、先生トンモ」と言う。 天井近く飛んでいるトンボを追いかける。 歓声をあげる。「トンモ、トンモ」と言う。 目を大きく開き、びっくりした表情になる。 触ってみようとはするが、触れない。 まわりの友達に「トンモ」と大きな声で言う。 触ろうとしないが、トンボが動くたびに「アー」と言って笑う。 「だめー」と首を振って怒る。 バイバーイ」と手を振る。	 トンボを捕まえて見せる。 トンボに噛まれる。 トンボを持ってみるよう勧める。 見守る。 持ちやすいように、羽のところを持つように勧める。 ベランダに出して、「もう、さよならしようかと言う。 「トンボさんもお家にかえりたいよ」と話す。 一緒に手を振り、見送る。
11月	「バッター、バッター」と指さす。 「イヤ」と応える。 「こわくない」と言う。バッタを持ち、保育者に見せる。 「あっち、おった」とバッタのいた方を指さす。 笑顔で、友達にバッタを見せる。	手押し車に乗せて、園庭を散歩する。バッタを見つけ、手に取って見せる。 「バッタ、持ってみる？」と尋ねる。 「恐い？」と聞く。 認める。 見守る。

	バッタを持って保育室に帰る。 自分でかごに入れる。 給食後、給食に出たさつまいもをかごに入れる。	保育室へ帰る。 かごを用意する。 バッタの世話ができたことをしっかり褒める。
12月	「せんせい、なに？」「あっスズメ！」と指差しながら口をとがらせる。「ねんねしょうる」と知らせる。 怖がることなく、スズメを触る。 両手でスズメを持ち、「ねんね、ねんね」と言う。友達が触ると、「だめ」と怒る。 箱に入れ、じっと見ている。少しの間見ているが、スズメが動かないため立ち去る。	ベランダにいるスズメを見つけ、子ども達に知らせる。 スズメを手に取り、生きていることを確認する。 スズメを手に乗せ、子ども達に見せる。 スズメの様子を見ながら、N子の両手に乗せる。 友達も触りたいことを知らせる。 スズメが弱るので箱の中へ入れるよう誘導する。
	「コッコ？」「せんせい、チュンチュンは？」と言って小屋の上を見る。 「ねんねしょうるん」と言う。「せんせい　コッコおった」「コッコ　ねんねしょうる」と言う。 「あそこー」と指差す。 「せんせいできん」と助けを求める。 チャボが草を食べるのを不思議そうに見る。 「いや、コッコにマンマあげるん」と言う。 草をやり続ける。 草をあげ終ると保育室に帰る。	ウサギとチャボの小屋に誘う。「コッコがおるよ」とチャボを指差し教える。 インコを探していることに気付き、「チュンチュンおらんなぁ？どこいったんかなぁ」と一緒に探す。 「どこ？ねんねしょうるん？」と聞き返す。 長めの草を見つけ、チャボに与えてみるようと誘う。 いっしょに草をやる。 給食の時間が近づいたので、部屋に誘う。 「またコッコと遊ぼうよ」「みんなお部屋に帰ったよ」と知らせる。 「これだけあげたら帰ろう」と誘う。
1月	「チュンチュンきた」と言う。 保育者の傍に寄って来て、ちらっと見る。 「いや」と言って泣きそうになる。 友達が触っているのを見て「よしよし」と言いながら撫でる。「Nちゃんのチュンチュンよ」と言って友達を押して、よく見えるところに行こうとする。 「いった」と言い、保育者にだっこを要求し、じっと見る。 「バイバイ」と手を振る。 「かえったなー、バイバイした」と外を指差す。	ベランダのマットの上に、羽を膨らませているスズメを見つけ、知らせる。 「スズメさん来たね。何しょうるんかな？」と言い、「よしよしする？」と聞く。 押すと危ないことを教える。 スズメが飛んで行ったのを見て「あー」と言う。 「また来てくれるといいね」と言う。
2月	「ウサギさん　おる」と言って走り出す。 「ピョンピョン」と言いながら飛ぶ。「うわー」とウサギに向って大声を出す。 草を見つけ、ウサギに与える。「食べた」と言ってニコニコ笑う。 「こっちコッコおる」と言いチャボの方へ行くが、また「ウサギさーん」とウサギ小屋の方へ行く。「Nちゃんの食べた」「Nちゃんの」「食べた」他児と競争のように草を与える。 「たべたー」と体全体で喜びを表し、「かわいい」と笑顔で言う。 「うん」と返事はするが、なかなか小屋から離れようとしない。 「バイバーイ」と大声で言い、手を振る。	手をつなぎ、園庭を散歩する。 「ウサギさんがびっくりするよ」と言う。 一緒に草をやり、見守る。 ウサギにさよならすることを勧める。
3月	園庭のプランターのスイセンやチューリップを見て「これなに？」と聞く。 咲いていないチューリップを見て「赤ちゃんじゃな」と言う。 並んでいるプランターを行ったり来たりして眺める。 花を指して、「これなに？」と聞く。 「ゼフィランサス」と何度も繰り返して言う。 クモを見つけて「みてー」と言う。 「あるきょうるで」「これかまれるで」と言う。 動かないクモを見て、「なにしょうるんかな？」と言う。「これー」と言って友達に教える。 「なにしょーるんかな」「なーこれ」と指を近づけて友達と行ったり来たりを繰り返す。 枯葉を使ってクモを触ろうとする。 「でておいで」「おらんで」とクモを探すが見当たらず立ち去る。	「これチューリップ」と答える。 「まだ咲いていないな」と共感し、これから咲くことを知らせる。 ついて歩き、見守る。 「ゼフィランサスって言うのよ」と答える。 「なにかおったん？」と聞く。 友達とのやりとりを見守る。 「どこ行ったかな」と気付くように言葉をかける。

近づき「ガニガニ」と笑顔を見せる様子が窺える。しかしM子とI男がケースを揺らすと「ダメ」と言って取り込み、保育者に注意されるといっしょにザリガニを見ていることから、友達と共有しようとする様子も窺える。保育者がする鋏の真似をして「チョキチョキ」と言いながら手を動かしていることから、怖いザリガニではあるが保育者とかかわることでザリガニへの親しみが感じられる。6月ではオタマジャクシのことを「・・シ・・シ」と言い、7月ではトンボのことを「ボ・・」と言っている。8月ではカブトムシを「カブトシシ」と言う。カブトムシがけんかをしているのをS子が怒るのを見て、自分も机をたたいてけんかをしてはいけないことをカブトムシに伝えようとする。9月では保育者に誘われてウサギ小屋に行き、少し離れた所から「こんにちは」とおじぎをする。また友達に誘われてウサギ小屋に行き、「ウサギさんこわいね」と言うと、友達に「こわくないよ」と言われ、「ウサギさーん」と大声で叫んでいる様子から、初めての小動物にこわごわかかわろうとしているN子の気持が伝わってくる。10月では部屋に入ってきたトンボを見つけて「トンモトンモ」と言い、触れないが触ってみようとしたり、「バイバーイ」と手を振っていることから、7月では見るだけだったトンボに対して親しみや興味が深まった様子が窺え

る。11月ではバッタを持つことができ、バッタをかごに入れ、給食後給食にでたサツマイモを自分からバッタのかごに入れていることから、バッタを持つことができた喜びとバッタへの思いやりが伝わってくる。12月ではベランダで弱っているスズメを保育者に教えてもらい、「ねんねしょうる」と言いながらスズメを触り、友達が触ると怒る。またチャボの小屋に行って保育者といっしょに草を与え、自分からも草を与えようとしていることから、スズメやチャボに親しみを感じている様子が窺える。1月ではベランダに来たスズメを触るのを嫌がるが、友達が触っているのを見て「よしよし」と言いながら触る。そして「Nちゃんのチュンチュンよ」と言って友達を押してよく見える所に行こうとしていることから、まだまだ独占欲が強い様子が窺える。2月では「ウサギさんおる」「ピョンピョン」と言いながら飛び、草を見つけて「たべた」と言って喜び、「Nちゃんのたべた」「たべた」と言いながら友達と競争のように草を与え、「たべたー」「かわいい」と言って体全体で喜びを表している様子から、ウサギへの親しみが深まってきている様子が窺える。3月ではプランターの花を見て保育者に名前を聞き、咲いていないチューリップを「あかちゃんじゃな」と言ったり「ゼラフィランサス」と繰り返して言っている。またクモを見つけて「なにしょうるんかな」と言い「これー」と言って友達に教えていることから、小動物や植物への好奇心が芽生え始め、クモを通して友達とかかわろうとする様子が窺える。

以上のことから、小動物には興味があるが怖がってなかなか触ることができなかったN子ではあるが、11月にバッタを持つことができたことが自信につながり積極的に餌をやり「かわいい」と言える程に親しみを感じられるようになっている育ちが見られる。そしてプランターの花を見て「これなに？」と保育者に聞いたり、動かないクモに「なにしょーるんかな」と言って、枯葉でクモを触ろうとしている様子から植物や小動物への好奇心の芽生えが窺える。また、「ガニガニ」「・・シ・・シ」「ボ・・」から「カブトシシ」「トンモ」「チュンチュン」から「ウサギ」「ゼラフィランサス」と名称を言葉で正確に発音できるようになってきている育ちが窺える。そしてウサギを「かわいい」と言い、咲いていないチューリップを「あかちゃんじゃな」と言っていることから、小動物や植物に対する自分の思いを言葉で表現できるようになってきている様子も窺える。保育者に注意されると友達と共有することはできるが、まだまだ独占欲は強い。しかし、少しずつではあるが友達に誘われてウサギとかかわったり、クモが動かないことを友達に教えていっしょにかかわろうとする育ちも窺える。

N子の一年間の育ちに保育者がどのようにかかわったかをみると（記録2参照）、保育者はカタツムリ・ザリガニ・オタマジャクシ・トンボを飼育して室内に取り入れたり、ウサギ・チャボ・チューリップ・ヒヤシンスを身近な所で飼育栽培して、N子がかかわる機会を積極的にもっている様子が窺える。そしてN子といっしょに見たり触ったりする機会をもち、怖くないことを知らせたり、言葉のでないN子に「ザリガニ」「トンボ」「カブトムシ」などの言葉を正しく発音して聞かせるようこころがけている様子が窺える。

3．まとめ

(1) 心の育ち

小動物には関心があるが触ることができず、4歳児に誘われただけで自分のスコップを取られると思い、誘ってくれた4歳児をたたくというように独占欲の強いY男の自然とのかかわりの中での心の育ちは、バッタやトンボを追いかけて捕ろうとしたり、サツマイモ掘りの時保育者に「ポンポンしたげて」と言われて友達にかかった土を払ってやったり、友達を誘ってトンボを追いかけたり、友達といっしょにツクシを採ったりすることができるようになったことと考えられる。しかしまだまだ独占欲の強い様子が窺えるが、保育者に注意されると友達と共有しようとする育ちも見られる。そして小動物や飼育動物や野菜や果物や草花への自分の思いを「おうちかえった、おかあたんいった」「おいちい、ほれ」「いっぱいおったなぁ」「おいもがのぞっきょうる」「いっぱいある

なー」と表現できるようになってきている育ちも窺える。このY男の自然とのかかわりの中での心の育ちは、イチゴ・ジャガイモ・サツマイモ・二十日大根を保育者に誘われて保育者といっしょに収穫し、保育者や友達といっしょに食べるという経験をとおして喜びや感動を味わったことが、大きなきっかけになっていると考えられる。

一人で遊ぶことが多く、ツクシを見て「ツツツツ」と言うなど植物には関心があるがまだ言葉がはっきりと言えず、小動物にも関心はあるが触ることができないN子の自然とのかかわりの中での心の育ちは、バッタを持つことができ給食のサツマイモをかごに入れてやったり、ウサギに餌やりをして親しみを感じたり、プランターの花を見て「これなに？」と聞いたり、動かないクモに好奇心をもって観察したり、友達に誘われてウサギとかかわろうとしたり、動かないクモを友達に教えていっしょにかかわろうとしたり「ウサギ」「ゼラフィランサス」「かわいい」「あかちゃんじゃな」等と名称を言葉で正確に発音したり表現できるようになったことと考えられる。しかしまだまだ独占欲の強い様子は窺えるが、保育者に注意されると友達と共有しようとする育ちも見られる。このN子の自然とのかかわりの中での心の育ちは、N子が保育者に誘われて保育者といっしょにカタツムリ・ザリガニ・オタマジャクシ・トンボ・カブトムシ・ウサギ・チャボ・スズメ等にかかわったことが、大きなきっかけになっていると考えられる。

(2) 子どもの心の育ちと保育者のかかわり

①環境構成

保育者は積極的にイチゴ・ジャガイモ・トウモロコシ・サツマイモ・二十日大根・大根・ブロッコリー・チューリップ・ヒヤシンス・カタツムリ・ザリガニ・オタマジャクシ・トンボ等を飼育栽培し、飼育ケースやプランターを部屋やテラス等の子どもの身近な場所に取り入れ、また園内の子どもの身近な所に畑を作って、子どもが小動物や植物（野菜・果物・草花）にかかわる機会をもつように心がけている。Y男の保育者は野菜を栽培することに積極的であり、N子の保育者は小動物を飼育することに積極的である。その結果、Y男の心の育ちは野菜や果物や草花にかかわる場面で多く見られ、N子の心の育ちは小動物にかかわる場面で多く見られる。このように、保育者が身近な所にどのような環境を整えるかということが、子どもの動植物への興味関心に大きな影響を与えると指摘できるのではないかと考えられる。また、Y男の保育者は園外保育に出かけて園外の自然に触れる機会をつくっているのに対して、N子の保育者は園庭での自然に触れる機会をもつように心がけている。これは園舎の立地条件によるものと考えられる。

②いっしょに自然にかかわる。

1歳児Y男の場合もN子の場合も、保育者は植物（野菜・果物・草花）や小動物にいっしょにかかわりながら誘導している。そして、いっしょにかかわりながら、怖くないことを知らせたり、名前を教えたり、見守ったり、共感したり、一人占めしようとした時には注意を与えている。N子の保育者は、言葉のでないN子に「ザリガニ」「トンボ」などの言葉を正しく発音して聞かせるように心がけたり、いっしょにウサギの餌やりをしており、Y男の保育者は子どもといっしょに野菜を収穫し、Y男や同じクラスの友達や年長組の友達といっしょに食べる機会をもっている。このように保育者が自然にいっしょにかかわりながら誘導し、収穫したり食べたり餌やりをしたりといった体験をしたことが重要なポイントになることが指摘できるのではないかと考えられる。

おわりに

0歳児と1歳児の自然とのかかわりの中での子どもの心の育ちと保育者のかかわりについて考察すると、0歳児の場合[5]は小動物を怖がったり興味関心のなかった自然に興味関心と親しみをもち始め、言葉で名称を表現できるようになり、名称を言いながら感動や喜びを表現できるようになった心の育ちが窺えるのに対して、1歳児の場合は興味関心があるが触ることができなかった小動物を触ったり追いかけて捕ろうとしたり、小動物や飼育動物に自分から餌やりをしたり、独占欲がい

まだ強いものの保育者に注意されると友達と共有しようとしている。さらに友達を誘ったり誘われたりして一緒に野菜や飼育動物にかかわったり、名称を正確に発音することもでき、自然に対する自分の感動や思いを自己中心的な表現ではあるが言葉で表現できるようになってきた育ちが窺える。

保育者のかかわりとしては、0歳児の場合と同様に1歳児の場合も、“環境構成”と“いっしょに自然にかかわる”という保育者自身が子どもの生活を誘導してやることは重要なポイントになると指摘できるのではないかと考えられる。“環境構成”については、0歳児の場合も1歳児の場合も保育者は積極的に飼育栽培し、飼育ケースやプランターを部屋やテラス等の子どもの身近な所に取り入れ、子どもが小動物や植物にかかわる機会をもつように心がけているが、1歳児の場合は、0歳児に比べて園庭の畑や飼育小屋など身近な環境が保育室から園庭へと少しずつ広がっていっている様子が窺える。“いっしょにかかわる”ことについては、0歳児の場合の方が保育者はいっしょにかかわりながら、子どもが自然にかかわれるようにより積極的に誘導しようとしている様子が窺われるのに対して、1歳児の場合はいっしょにかかわりながら友達と共有することを知らせたり、餌やりや収穫や収穫した物を食べる体験をしながら誘導している様子が窺える。

今後、2歳児の自然とかかわっている場面での観察記録を中心に考察を進める予定である。

この研究は、岡山県井笠管内三郡保育協議会の13園の代表保育士と平成10年度から平成13年度にかけて「心が育ち合う保育をめざして－自然とのかかわりを通して－」について研究し、平成13年度岡山県保育研究大会で発表したものを、加筆修正したものである。この研究にあたり、ご協力いただきました三和保育園・敬親保育園・若葉保育園・六条院保育園・竜南保育所・寄島西保育所・里見保育園・矢掛保育園・三谷保育園・中川保育園・小田保育園・芳井保育園・いずみ保育園の先生方に厚く御礼申し上げます。

引用文献

1）高月教恵「子どもの主体性と教師のかかわり(2)－自由遊びにおける行動観察記録を中心に－」新見公立短期大学紀要第19巻　1998　p.74
2）高月教恵「子どもの心の育ちと保育者のかかわり(1)－0歳児の自然とのかかわりを中心に－」新見公立短期大学紀要第23巻　2002　P.26
3）同上書　PP.31－32
4）井笠三郡保育協議会「平成13年度岡山県保育研究大会『心が育ち合う保育をめざして』の資料」2002　p.38
5）(2)に同じ　P.31